第五講　町村史の編纂（二）

印牧邦雄

編修の方法　町村史を編修するに当っては、その地域における先人たちの生活に中心をおいて、政治・経済・社会・文化等との相互関係を究明していかねばならない。生活史に重点をおく場合、どうしても社会経済史が主軸となる。だが一方に偏したものであってはならないから、各部門を含めた編修が望ましい。大正末期に刊行された福井県史は「従来地方史に閑却されがちであった社会経済史の方面にも考察の目を向けた注目すべき特色」をそなえており、当時としては斬新な編修であった。またこの県史編纂に携わった牧野信之助氏は岡本村史を編纂するに当って、「歴史篇を主軸に、考古・地理・民俗等の諸篇を加え、町村史の編纂上、一新機軸を出す抱負」をもっておられた。私も学生時代に、この一部を担当したが、これによって町村史の編纂を初めて知ったわけである。

それでは町村史の頁数はどれ位にするのが適当だろうか。これに就いて数例挙げると、岡本村史が四三三、西田村誌が五三六、東藤島村史が六八四、細呂木村誌が七一六、木部村誌が八六一、金津町史が七三一、川西町史が八四八頁で、大野町史のように三〇〇乃至六五〇頁のものもあり、また三国町史のように一冊で千頁を越える大部なものもある。最近の町村史（誌）では七・八百頁のものが多いけれど、史料や予算等の関係もあるから、それ等に追随する必要はなく、独自で冊数、頁数を決めればよいわけである。次に章のたて方と分量であるが、一・二例をあげると、岡本村史は古代・中世、近世の村落、近世製紙業の発達の三編からなり、三国町史は自然・古

代・中世・近世・近代・戦後の六編からなっている。各時代の分量は前者が古代に四%、中世に八・八%、近世に八七・二%を当てゝいるが近代篇はない。後者は自然に三・三%、古代に四・八%、中世に七・一%、近世に三四・二%、近代（戦後を含む）に四五・六%を割いている。一般に古代史より順を追って記述しているが、我々の生活と直結する近代史に重点をおいて、逆順に記述する方法もあり得ると思う。

個人で編纂する場合、一貫した編修が出来る反面、興味をもっている時代とか部門と、そうでない時代とか部門とでは、力の入れ方にムラを生じ、精粗さまざまなものが出来上る欠点がある。また共同研究のような場合、相互の関係が密接でないと統一したものが出来なくなる。然し共同研究は多方面な成果を挙げることが出来るので、編纂者を決め、原稿を統一し、書き下しさえすれば一貫したものが出来上るだろう。

いわゆる郷土誌ではなくて、町村史である以上、歴史の記述に主眼をおかねばならないことは云うまでもないが、そのために生活環境を無視することは好ましくない。地的唯物論のように、環境のもつ役割を余り過大評価も出来ないが、それを離れては、生活はあり得ないわけである。それで従来の郷土誌のように、地形とか地質を一々羅列するのではなく、それぞれの歴史とか人間生活への影響を具体的に記述すれば、もっと立体的な町村史が出来るのではなかろうか。

原始時代では、考古学や民俗学等の成果を取入れるべきであるが、遺跡・遺物の説明に当っては、考古学で明にし得る限度を越えないよう記述すべきであり、考古学と歴史学とを結びつけるのに、木に竹を継ぐようなことは避けるべきである。

奈良平安時代では条里制の復原とか、荘園の開発等の問題を取上げねばならない。本県に於ける条里制の復原は、まだ地域的にしか行なわれていないから、条里制遺構とか、切絵図等を調査して復原作業を行ない、当時の生活基盤を究明すべきである。当地は畿内地方に近接している関係から、東大寺領荘園等の占定が活潑に行なわれた。だが当時の文書・記録のあり方からいって、地元には文書・記録が残っていないので、正倉院文書や延喜式等から研究をすゝめなければならない。史料の乏しい当代の歴史を記述するには、どうしても郷土史の範囲を越えざるを得ないであろう。また当代の村落を歴史考古学的に明らかにし得たらと思うが、この種の調査は決して容易なものではなく、道守庄の発掘がよい教訓を示している。三国町史の場合、直接関係のある当代史料は、続日本紀と延喜式だけであるが、新見地に立って考察すると、蝦夷征討の基地としての役割、東大寺領荘園の開発と三国湊、三国と三国真人との関係等、種々な問題が取上げられ、この町史によって東大寺領荘園と三国湊との関係を初めて明らかにし得たと思う。

中世史を記述する場合も史料の制約にゆきあたるだろう。大音家のように中世文書を多数所蔵している旧家は少いから、大日本史料とか大日本古文書等に、関係史料が載っていないか調べてみる。北国最大の荘園と云われる坪江・河口庄関係の史料は内閣文庫に所蔵されていて、三国町史に活用することができた。中世では、荘園関係の地名と現在の地名を対照などして復原するとか、中世の灌漑用水の利用方式と現在のそれとを比較するとか、郷村制の発達と一向一揆等種々興味深い問題が取上げられ

る。こゝにも郷土史の範囲を越え、研究領域を拡大する必要が起ってくる。三国湊は、坪江庄の河港として発達したので、町史では坪江庄の成立と構造、民衆の生活、庄園制の解体、三国湊の発達、三国を中心とする真宗教団の展開等を取上げ、詳細に記述した。特に湊の収益権を記述するに当って、本誌に掲載された志積浦の安倍文書が大いに役立った。

近世史になると古代・中世に比較して、資料が豊富になる。旧家所蔵文書や区有文書等から幕藩体制下における都市や村落の自治・住民の構成・産業・交通の発達・社会問題等を取上げることが出来る。漁村であれば、漁業制度・経営・漁法等を取上げる必要がある。三国湊の場合、越前平野の外港であり、西廻航路の重要港であったので、史料の収集も広範囲にわたった。地元ばかりでなく、史料館所蔵の越前史料とか、東北大学所蔵の内田家文書等の収集・筆写が行われ、豊富な史料を駆使して、海運・自治・宗教・文化等、海運の活気を呈した事情や、活気ある住民の生活を詳細に記述した。

近代史では町村役場等に所蔵されている資料を調べたり、故老等から聴取調査をして、地方行政と自治・地租改正・農民運動・産業の近代化・宗教と教育・交通と通信・軍事問題等を取上げる必要がある。三国町史では役場等に所蔵されている資料や多数の人から聴取調査をして近代史を組立てた。そして豊富な図表や挿絵を使用して、三国町の景観・交通・貿易等に就いて記述したが、近世から近代にかけての近郊村落の発展を、人文地理の立場から詳細に描いたのも一特色であろう。尚、むづかしい地名・人名に読仮名をつけたり、記事の出典を明にしたり、巻末に年表や索引をつけたりすれば、読者には便利だと思う。

どのような町村史が出来ても、いろいろな点で不満があるものである。例えば三国町史のようにぶ厚くなると、どこかに概説的なものがほしいと云うような声が出てくる。編者としては決して考慮しなかったわけでなく、各章のはじめにカット入りの概観を掲げたのは新しい試みではないかと愚考している次第である。何ずれ各方面の要望を取入れて三国港史を書いてみたいと思っている。

印刷と校正　町村史の大きさはA五判が適当である。本文活字は大抵九ポか五号を使用しているが、九ポの方がより経済的で、註も七ポ乃至八ポがよい。九ポで組む場合、横一七行、竪五二字詰がよいと思う。原稿用紙もなるべく書物の行数、字数に応じたものを印刷して使用すれば編集上、便利である。写真版や凸版は、視覚的効果があるので、予算の許す限り多く使用した方がよい。三国町史では口絵に原色版一、アート別刷百頁（図版一五五）、本文図版二三七、表一九〇を使用している。写真はもちろん鮮明なものが要求されるし、地図、グラフ類の原図はなるべく製図工に浄書してもらった方がスッキリしたものが出来る。町村史（誌）の中には統計を多数使用しているものもあるが、図化した方がより効果的である。図中に入れる文字は、写真植字がよい。写真版や凸版のサイズや配置は、印刷所に任せずに編修者が決めるべきである。印刷所は学術書の印刷に経験をもち、しかも懇切叮嚀な印刷所を選ぶべきである。大都市の一流印刷会社は確かにアカヌケした印刷をするが、地方の印刷所は、校正にも便利だし、印刷費も安くつく。最近地方の印刷所も文選、組版等の技

術が向上しつゝあり、然も優秀な印刷機を備えつけたりしているので、必ずしも大都市の一流印刷会社に依存することもない。従来刊行された町村史（誌）のうち南中山村誌・西田村誌・岡本村史・森田町誌等は県外の印刷所で印刷しているが、大抵県内の印刷所で印刷している。原稿はなるべく完全原稿にして出すようにすれば印刷もスムースにゆく。原稿とゲラ刷とでは見た感じが違うので、ゲラ刷をみて文章を訂正したり、途中で新史料が出たりすると、それを附け加えたりするから、どうしても組替えしなければならなくなる。度を越せば当然組替料を請求されるし、納期も遅くなる。だからなるべく完全原稿にして、途中で変更しないよう、事前に努力すべきである。校正は正確が肝要であるが、先ず印刷所に内校してもらい、それから三校位で校了にすれば、印刷もスムースに運び契約通り納品してくれるわけである。ただ執筆者が何人もいる場合、なかなかスムースに運ばないであろうから、編纂者は各執筆者との連絡を密にし、協力してもらうことである。部数は五百・七百・千と一定していないが、予約とか寄贈等を見込んで部数を決める。予約募集には内容見本を印刷して配布すると便利である。尚印刷製本代の時価を挙げれば次の通りである。

1　A五判　一頁一七行五二字詰平組　八〇〇円
2　写真版　一坪（一寸平方）　六〇円
3　凸　版　一坪　五〇円
4　製本代　八百頁一冊分　二五〇円
5　そのほかに紙代及び刷り代

むすび　要は従来の郷土史の研究視野がせまく、従ってその結果が限られた郷土にとじこもる弊は否み難かったと思う。それで今後町村史の編修に携わる方は、一定の問題意識をもつと共に、研究視野を広くして、郷土史（誌）のカラを破ってほしいものである。

（筆者は県立藤島高校教諭）